

第5回区西南部地域リハビリテーション研究大会 報告書

<開催内容>

日 時：平成31年3月2日（土）14:30～16:30

会 場：中目黒GTプラザホール

参加人数：69名

内容：シンポジウム

テーマ：「最期まで『その人らしく』を支えきる

～人生の最終段階を支える多職種の関わり～」

【座長】

三軒茶屋内科リハビリテーションクリニック長谷川幹

【シンポジスト】

コパン訪問看護ステーション 田中雄大（看護師）

成城内科 武藤友和（理学療法士）

初台リハビリテーション病院 遠藤健二郎（言語聴覚士）

かみよん訪問看護ステーション松本えり子（介護支援専門員）



<内容報告>

シンポジストお1人ずつ、自身の事業所の概要と、具体的に事例を通し、自職種としてリハビリテーションという切り口で「人生の最終段階を支える」ためにどのようなことが出来るかを発表。その後、再登壇いただき、座長の長谷川氏のもと、ディスカッションを行った。



コパン訪問看護ステーション田中氏は、「苦しんでいる人は自分の苦しみを分かってくれる人がいるとうれしい」という援助的コミュニケーションの基本や、苦しみの構造（希望と現実の開き）について語られ、事例を通し、人生の最終段階のリハビリは、その人にとってのリハビリの意味を考えて関わるのが重要であり、そのためには専門職がチームで支えていくことが大切、と述べた。



成城内科武藤氏は、生活動作水準の階層性の図を用い、実用性の高い「安楽性」「安住性」を目標にしつつも、理学療法士としては「機能性」「安定性（再現性）」にも目を向け、働きかけていく必要がある、と述べた。また、本人が造園した公園を見るための外出支援を行なった事例を通し、人が幸せを実感するのは「このために生まれてきた」「役に立った」と感じられる時であり、業務の中でそのことを支援できるよう取り組んでいる、という報告がなされた。



初台リハビリテーション病院遠藤氏は、気切により口頭困難な四肢麻痺の利用者を例に、家族の「旅行に行きたい」という希望から端を発した支援の中で言語聴覚士が本人の意思表示を支援し、家族のニーズから本人のニーズへと変化させる支援し、そのことが本人の能力を引き出すことが出来たことについて報告された。その事例は状態悪化により旅行を実現することは出来ずに終了、となったが、その目標に向かう過程が本人・家族のQOLに繋がったのではないかと語った。小さなことでも目標を持って関わること、それを一緒に探していくこともリハビリ職の役割ではないかと述べた。



かみよん訪問看護ステーション松本氏は、介護支援専門員の立場からは、希望はあっても実際に自宅で亡くなる事例は少ない現状について報告があった。そこには、意識的課題（本人と家族の意向の違い、終末期の過ごし方がイメージできていない、不安が強い等）と物理的課題（在宅死を支えるには公的サービスだけでは不足がある、社会資源も少ない等）が影響していると語った。ACP（アドバンスケアプランニング）が勧められているが、ケアマネジャーにもACPがまだ根付いていないとは言えず、本人、家族に自身の最期についての話し合い（人生会議）をもつことを早期から働きかけていくことも必要であり、それが本人が望む最期を迎えられる支援につながっていくのではないかと述べた。

ディスカッションでは、座長の長谷川先生より、田中氏の発表にあった「苦しみを支える」というのは、具体的にどういった行為を指すのかと投げかけられた。一口に「支える」といってもそれはどう対応することを言うのか具体的に言葉にすること、それを考えることが重要である、と示された。研修などで示される綺麗な言葉（例えば、「支える」「寄り添う」「傾聴する」など）をそのままにするのではなく、それを実践に落とし込むことが重要であり、そのためには具体的に「何をやる」というところまで考えを深める作業が必要である、と述べられた。

また、遠藤氏の事例に対し「もし、旅行に行けていたら「プロセスが大切」という気づきが得られたか？」との投げかけがあった。この事例は、「旅行に行く」という目標を叶えられなかったことで、目標達成に目が向きがちの私たちに、目標に至る過程そのものがその人を支える支援になっているというプロセスの重要性を教えてくれるものとなったのではないかと指摘された。

アンケートからは、参加者が日々の実践の中で悩みながら向き合っている様子が読み取れた。人生の最終段階をいの方々に何が出来るのか、簡単に答えが出るテーマではないが、だからこそ、そこに専門職として向き合い考え続けることが必要である、と改めて感じた参加者が多いようであった。